

■第127回 み言葉の分かち合い 《解説と黙想》

●第1朗読 創世記12・1～4

この箇所は、墮落した人類（原罪・ノアの洪水・バベルの塔）から、神はアブラムを選んで全人類を祝福し、救いへの分岐点にします。人生の基盤を手放し、生まれ故郷の父の家を離れることで、神は自らが頼むものを断ち、誰に従うのかを明確にさせます。信仰は、神を信頼して従って行く途中で道が示されるので、不確かであっても神に従い、神が示される地へと行きます。当時のアブラムには子がおらず、不可能に近い約束が大いなる国民で、神との正しい交わり（命・使命）が「祝福」です。神の名を高め、祝福を水源とし、アブラムを水路にして、祝福の源から祝福を霊的な民に流します。神とアブラムとは運命共同体となり、神が彼の背後におられ、あなたを祝福する人をわたしは祝福し、神の救いの計画に逆らい、あなたを呪う者をわたしも呪う。中世のヨーロッパでは、ユダヤ人を用いた国が大航海時代の覇者となり、彼らを軽視した国は衰退した歴史があります。現代のキリスト信者は、聖霊による洗礼で、アブラムと繋がっています。特定の国民に限定されず、全人類は地上の一つの家族（氏族）であり、神はこれらすべての方を祝福されます。アブラムは、神に質問や条件は出されず、主の言葉に従います。アブラムが立ち止まった場所がハランで、新しい召し出しに遅すぎることはなく、七十五歳となったアブラムは、神の地へと出発します。

【著者の一言】今もアブラムとは、同じ聖霊によって結ばれていると知り、ホッとしました。

●第2朗読 2テモテへの手紙1・8～10

パウロはすでにローマで投獄され、殉教を覚悟した状況の中で福音を語り、イエスを主として告白することが恥とされた時代、テモテの心境を捉えた手紙を彼宛てに出します。パウロは、福音を恥じてはならない、と語ります。イエスが主であり救い主であるとの体験と告白の証しは、イエスの愛と真理を捉えており、これまでの生き方そのものが変えられ、主の囚人となります。世間的な評価や失敗への恐れが恥を生みますが、信仰者はこれに支配されることなく、聖霊によって神の力で支えられます。福音による苦難を避けることも、孤立することもはなく、教会と共に苦しみを耐え忍ぶよう勧めています。なぜなら救いは、福音から生まれる出来事なので、神ご自身の計画と恵みによるからです。救いは、神の側にある価値観へと移され、新しい神の国に属する者として生きる聖なる招きであり、呼び出しです。この救済の計画は、被造物が存在する以前の永遠の昔から、神の内にはありましたが、これは長く隠されていました。それがイエスの出現により明らかにされたのです。イエスの復活で、死の支配は打ち破られ、死を滅ぼす決定打となります。神と共に生きる新しい永遠の命が不滅の命と言い、これは福音によって示されたのです。パウロは、この福音は神ご自身が保証されておられ、教会を通してこれが高らかに宣言され、テモテとその後続く信仰者たちを力強く励まします。

●福音書朗読 マタイ17・1～9

ペトロが、生ける神の子です。（マタイ16・16）との信仰告白をしたのを受けてイエスは、自身の受難の予告と復活について語ります。（マタイ16・21）弟子たちは栄光のメシアを待望しており、受難のメシアは想定外で、イエスが神の子（メシア）なのか、と動揺が起きます。この箇所での変容の目的は、①弟子たちに天からの保証を与え、イエスの受難は神の計画である。②神が、イエスは神の子であると証言する。③旧約全体をイエスが実現させることを知る。受難予告の六日の後、（天地創造は六日）神とイエスが会おう場所は高い山で、ここで彼は神の栄光を受け、顔は太陽のように輝き、服は天上に存在する光のように白くなります。旧約を代表するモーセ（律法）とエリヤ（預言）が現れ、イエスの最期について語り合います。（ルカ9・31）ペトロはこの光景を見て、すばらしいことだと語り、仮庵祭（喜びと完成を祝う祭）を連想して、仮小屋を提案します。そこに神の臨在を示す光り輝く雲が現れ、「わたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」との声が響きます。最終的な決定権者はイエスにあると聞き、弟子たちは服従の姿勢としてひれ伏します。栄光の主が、弟子たちに近づき、そっと手を触れ、恐れるなど言われます。栄光は、人の子（イエス）が死者の中から復活することで完成するので、この時期が来るまで、だれにもこれを話してはならない、とイエスは命じます。【著者の一言】この場にいた弟子たちは、全身が震えだし、恐れと恐怖のあまり体が硬くなったことでしょう。

著者 蒲池 明憲